

Nobility Proof and Swashbuckling

ひかり
日伐ともこ

突然傾いた船体に足を取られ、視界がぐるりと回転した。

視界の中に映るのは、蒼天と碧海、白雲と波頭、二重の空か二重の海か分からなくなつた光景。紺の髪がその中に広がる。

反射的に腕を伸ばすも、主帆柱付近の索には手が届かず。

そのままだつたら、王子は船の外に投げ出されていた、かもしれない。が、伸ばした手は、上空からの別の手に掴まれた。

「無様なもんだな、王子様よ！」

降り注いできた軽口を、王子は苦笑しながらも受け入れた。

「まったく何やってんだよ。あんたがぼーつとしてるなんてよ」

上空——横断索伝いに下りてきて、王子の手を掴んだのは、主帆柱の見張り台で警戒していた青髪の青年であった。あの揺れの中、動じることなく索梯を下りてきて、王子の危機に間に合つたのである。船に慣れた海賊ならではの能力だろう。

「上から何回も叫んだのによ。あんたでもこういうことがあるんだな」

先程と似た唇口だが、声音と視線の中に咎めの色がある。

「……すまなかつた」素直に王子は詫びた。

「反省したならいいさ」

にひひ、と表現するのがもつともふさわしい、救い手の笑い声が聞こえる。

顔を上げ、粗野だが気持ちのいい笑顔を相方の容貌に見た。王子が緊張を解き、笑い返そうとした、その時。

「うっかりは仕方ねえ。でもな——」

相手の顔から、笑みが消えていく。

残つた表情は、ひどく真剣味を帯びた、普段の姿からは到底想像もできないもの。

海都と深都が諍いを引き起こしていた時。彼らのギルドもまた、海都と深都に分かたれた。二都の真意を探る手段だつたが、信用されるには、元仲間相手でも、和やかにしているわけにはいかなかった。

青髪の海賊は王子とは反対側のリーダーとして、何度も立ち塞がったものだ。

海賊の容貌は、その時と同じ表情をしていた。敵を怯ませる猛禽の眼差しで王子を射貫き、青年は口を開く。

「一体、何だ？ あんたがそこまで考え込むなんて、ただごとじゃねえぞ？」

……そうだ。自分は何を考えていたのだろうか？ 己の思考を前に王子は困惑する。

二都の誤解は解け、因たる真相は解かれた。平和を取り戻した今、我を忘れるほどに解決を模索するような難事は、どこにもない。

——否、一つ、あった。

心の奥底に凝^こっていた「それ」の一端に
触れ、形を理解し、王子は言葉返しした。

「……世界樹と、『魔』のことだ」

「……はあ？」

海賊は虚を突かれたように、素っ頓狂な
声を上げる。

『魔』については、深都ですら、それを
押さえ込む世界樹より、放置を命じられて
いた。『魔』の力は人間が手を出せる領域
にはないからだ。いかに世界樹の迷宮を制
した冒険者として、例外ではあるまい。

深都を去る直前の深王から聞いた話によ
れば、その決戦は何百年、何千年、あるい
はもっと先——そんな状況にまで気を回す
のは、正気の沙汰ではない。海賊の返事は、
そんな思いを内包しているのだろう。

王子とて、客観的には同じ考えだ。

しかし、彼にも意地がある。他国の、し
かも第三王子とはいえ、王族であり、民を
統治し導く立場にいる、という矜持が。

王子は改めて心を引き締め、真剣な眼差
しを海賊に向けた。

『世界樹が海都の一部を沈め、『大異変』
が起きた。未来に世界樹が動けば、同等以
上の災害が起きるのではないか？ ならば
『魔』を直接人間や機兵が倒した方が、被

害は少ない、と思う」

「いやまあ、理屈としちゃそうだけどよ」

呆れた体で肩をすくめ、海賊は続けた。

若干の恐れが混ざってか、それまでよりや
や声が小さかった。

「……そもそも倒せるのか、そいつ？」

あの真祖が僕となっていた存在なのだ。

「……どうであれ、放置はできない」

強い言葉で王子は宣うた。

「実際にこの目で確認して、我々で打倒が
無理そうなら……戦う意志を持ち、恐怖に
屈しない者達に、助力を求めろ。エトリア
やラガード、僕の祖国やおまえの部族に」

「まあ、あの人は助けてくれるだろうな」

海賊が言う人物は、エトリア樹海探索で

『英雄』と呼ばれた冒険者ギルドの統率者

であった。他の誰が『魔』に尻込みしても、

かの聖騎士は必ず参戦してくれるだろう。

とはいえ、いくらなんでも一人では、戦
力的に不安だ。他の者が協力を決したら？

王子はうつすらと笑みを浮かべる。

周囲の空気が、明らかに硬度を変え、王

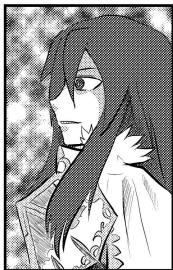
子と海賊の間に見える鉄条を引いた。巫

医あたりならば、彼の周りを包む、恐ろし

い勢いの気の奔流を見たかもしれない。

「協力を決する者がいたら……『王国』第三

王子の名において、処断してくれる」



「お、おいてめえ!」海賊は突剣を抜いた。
「いきなりなんだ、その容赦のなきは!」

はずみで思わず取った行為だろう。王子
に向ける剣先は細かく震え、その行動に気
乗りはしていない様が、ありありとわかる。



そんな様を目の当たりにしながらも、王
子は歯牙にも掛けない様子で言い放つ。

「人類全体が『魔』に支配されるよりは、
ましな話だろう?」

「おいおいおい、どこの狂王様が言い

そんなセリフを吐くんだ！」

さらに眼光を強める海賊を、王子は長い髪をかき上げながら一瞥した。これは必要なことだ。

——一人でも多くの民をよりよい道へ導くために必要なことだと断じたなら、いかなるものをも犠牲にせよ。そう行動できることが、王たる証だ。

そう語りかけてくる父王の真剣な目が、思い起こされた。

王族としてそう教わって育ってきた自分を止めたいなら、海賊も覚悟を決めるべきなのだ。甘い心は捨てて、その突剣を躊躇いなく振るうべきなのだ。

そうなつたら、自分は。ここで死ぬわけにはいかない自分は——。

「何、虚勢張ってんだよ、あんたは」
王子の身体はその声に貫かれたように、びくり、と跳ねて硬直する。

五つ数える程の間の後、全身が熱くなつた。無数の悪意ある眼差しに貫かれる気分に似ている。羞恥によるものだと理解するまでには、さほどの時間はかからなかった。「虚勢などではない！ 僕は責務を果たそうとしているだけのことだ！」

何が羞恥の元なのか、自分では分からない。ただ、それに気付かされることを恐れ

るように、王子は言葉を盾として放つ。

「我が国を、世界を未来に導くという責務をな！ 好きなように財貨を奪っていけばいい海賊にはわかるまいがな！」

「——な、なにをおつ？」

盗人呼ばわりされれば大抵の人間は怒る。盗賊でも義賊と標榜する者なら尚更だ。売り言葉に煽られてか、海賊は再び突剣を構えた。先程のような逡巡は全くない。

そして王子も、己の目的の前に立ち塞がる、怒りの眼差しを向ける敵に容赦する気など、微塵もなく——。

不意に海賊が動きを止めた。凍るよう立ち尽くす中、眼球だけがせわしなく動く。

王子自身にも異変があった。目に映る光景はゆらゆらと揺れ、視界は半分暗い。ひどい眠気に襲われるに似た気分。

どこからか聞こえるのは、不思議な歌声。

空気を震わさず、耳の奥に直接届く、極低音の音の波。その「歌」を聞いたのは、初めてではなかった。確か、冒険初期、深都に辿り着くより前に、耳にしたような。

「じ……実力行使だあ!? 勘弁しろよ！」

微睡みに似た気怠い気分をなぎ払う、鞭の風斬り音は、海賊の声をしていった。

地面が——否、船がゆつくりと揺れてい

る。揺れは次第に大きくなり、船室の方から揺さぶられた仲間達の悲鳴が聞こえる。王子もよろめき、甲板に倒れそうになったところで、何かに右腕を挟まれた。

がつちりと腕を掴むそれは、海賊の右手だった。本人の視線は王子の方にはなく、遙か彼方を見つめている。前方に渦を見付けた時の数倍も真剣なその表情に、思わず同じ方向を見た王子は、水平線に沿って広がる白い泡立ちを見た。

それは、沸き立ち、立ち上がり、吼え猛る水音を引きつれ、奔つてくる。そして。

——頭を冷やせ、愚か者どもが！

波間に巨大な白い魚？ 獣？ とまかくそのようなものの姿を認識した、次の瞬間。大海の弩号が、冒険者達の船を襲った。

強い衝撃に呼吸もままならず、水流に攫われそうになる。そんな中でも、右手首を掴む力は揺らぐことはなかった。その支えなければ、今度こそ海に投げ出されたに違いない。

やがて、波が取まり、気の抜けた音と共に水が船から流れ落ちていって、ようやく王子は空気を食った。喉の奥が空気と擦れ

て、覗かれた音を立てた。幸い、それ以上の打撲や痛みは大したことはなく、やがて呼吸も落ち着いた。

「……頭、冷えたか？」

横合いからの声に。王子は顔を向ける。

海賊は索梯にもう片方の手を掛けていた。指は鉤となつて格子状に編まれた綱を掴む。危機が去つても離さないのは、力を入れすぎたせいで強張っているからか。指先が血の赤にまだらに染まつているのが、目に入った。

「お前は何をしているんだ！ そんなことしなくても——」

王子を救うために見張り台から素早く下りてきた技能をもつてすれば、波が来る前に索梯を上れたはずだ。見張り台までは無理でも、波が届かない場所まで。だというのに、この海賊は……！

「いや、おれも、頭冷やそうと思つてよ。

あんたを……傷つけてしまえ、とか考えちゃまつたらなら」

王子と索梯から腕を放した海賊は、王子の言いたいことを察したか、あさつての方を向きながら、ぼそりと呟く。

「それに……仲間を見捨てるわけには、な——
すとな、と、自分の周りに憑いていた悪意の視線が落ちたような感覚がした。胸の

裡に湧き出た羞恥は、先の理由の分からもいものとは違つた。

自分は、この友を、いとも簡単に排除しようとしていたのだ。おまけに、そのありかたすら侮辱した。

「僕は、王の誇りを傘に着た愚か者だ……」

「まつたか。でも反省したならいい」

にひひ、と表現するのがもつともふざわしい、救い手の笑い声が聞こえる。

顔を上げ、粗野だが気持ちのいい笑顔を見方容貌に見る。



「それに、あんただけを責められるような話じゃないかもしねえぞ」

そして、話の雲行きが怪しくなるのも、前回と同じだった。

「今の波は、ケトスのおっさんの作業だよ。

『魔』の気配を感じたとかで、駆け付けてきてくれた」

「ケトス？ 海王ケトスか？」

波間に見たものを思い出す。魚のような獣のような巨大な白い姿。ああ、確かにあれは、巨大な白鯨だった。

「波ぶつ放す前に説明はしてくれただが、あなたには感応能力が上手く効かないって言つた。たぶん、おれよりもつと『魔』の影響を受けてるからだろうつて」

「僕が『魔』の影響を受けている……!?」

さらりと、とんでもない話を聞いた。

とはいえ、指摘されれば心当たりがなくもない。『魔』に対抗する手段を考えているうちに、暴走していった己の感情。己の正しさを振りかざし、友人さえ容赦なく手に掛けることを決心した、異常な思考。

「……そうか、これが『魔』の力か……」

振り返れば分かる。自分を突き動かしていたのは「恐怖」だ。

今そこにある危機を何とかしないと世界は滅びかねない。王子として仕るべき行動を取らなければ、恥さらしとなる。冷静に考えれば、取るに足らない思考。だが、混乱の渦中にある者は、それが己の全てと思ひ違い、間違つた道を取る。そして、その行動に影響されたものにも、恐怖は伝播する。海賊が王子を傷つけよう（否、本当は「殺そう」なのだろう）と考えたのも、

その影響に違いない。

「魔」は、人の認識と理解を糧とし、恐怖などの感情を餌として成長するという。深都が感情を持たないとされる機兵を主力とし、海都の助力を撥ね付けていた理由である。

先の思考の中に感じた「目」や「視線」は、ひよつとしたら、「魔」のものであったのかもしれない。しかも彼である真祖を失った「魔」は、己のことをよく知る者——つまり自分達に働きかけ、恐怖という餌を集めようとしたのだらうか。



「なあ。あなたは……こんなこともできるヤツ相手に、立ち向かう気か？」

不意に言葉を向けられ、王子は答える。「立ち向かうかどうかはまだ分からない。だが、様子を確認したいのは本音だ」

敵に「恐怖を媒介に人を狂わせる」力があるなら、対策を取る必要がある。これか

らは「魔」が、多数の人類に自らの存在を知らしめる行動に出るかもしれない。走狗となり得るフカビトはたくさんいるのだ。

「そか」海賊の青年は深く頷く。次に彼が口にした言葉は、王子にとつては思いがけないものだった。

「じゃ、おれも付き合うわ。「魔」につけ込まれやすいあんたのことも心配だし」

「……は？」
こいつは馬鹿か。

そう思ってしまった。味方になってくれるという事実は嬉しいにもかかわらず。なにせ、彼はたつた今、「魔」の力を知った。恐怖を抱いた者の心を絡め取る、ある意味、いかなる攻撃よりも恐ろしい力を。

……白状しよう。王子である自分は、「民を統治し導く立場にいる」という信念によつてのみ支えられている。それがなかったら、「魔」の力を知った今の自分は、状況に背を向け逃げていたかもしれない。

だというのに、この海賊は。「お前はなんで、平気でいられる？」

「なんで、つてなあ……」
海賊は、少なくとも王子から見れば飄々とした態度、間延びした口調で答えた。「強いて言うなら……空威張り、みたいなもんかな？」

「空……威張り？」単語を初めて聞いた子供のように、王子は繰り返した。

もちろん言葉の意味は分かる。分らないのは、陽気で自信たっぷり、自分の調子を崩さない青年、と思つていた彼から、その姿が虚偽だったという告白に等しい単語が出てきたこと。つまりは、やはり恐いということだ。本音で恐いと思うなら、無理に付き合う必要などないのに。

そんな王子の内心を知つてか知らずか、海賊は、にんまりと笑みを浮かべた。それが自然なものか、彼の言う「空威張り」なのか、王子にはさっぱり区別できない。

「ほら、海賊つてヤツはよ、相手をどじらせてなんぼつてところがあから、やることなすこと、ハデにいくもんなんだよ」

確かに、戦闘時の海賊は、その動きがいちいち大げさだったような気がする。いかにも自分が隊の要、死にたいヤツは掛かつてこい、と主張するかの体捌き。大技を使うときなど、普通なら精神的に疲弊するはずなのに、却つて生き生きしていたような。

「逆に相手に呑まれて怯えたら、待つのは「敗北」。樹海なら「死」だけ。だつたら空元気だろうが空威張りだろうが引つ張り出してくるしかねえだろ」

王子は海賊の主張に頷かざるを得ない。先に何が待つかわからない樹海の中で、その様にどれだけ勇気づけられたことか。

本心だの虚偽だのという区別は不要だった。彼は生き残るために己を奮起させ、結果として仲間達を鼓舞していた、その事実には揺るぎはない。

「しかも今度の相手は『魔』だ。海賊は、握った右手と開いた左手を、軽く打ち合わせ、忌々しげに吐き捨てた。「あんなことするのが海に居座ってたら、商売あがった。ヤツをどうにかするのは、海賊にも必要なことさ。びびってなんかいらねえよ」

唐突に海賊は、王子からわずかに目を逸らすように顔を背け、ぼそりとつぶやいた。「……でもまあ、海賊王ならともかく、おれの空威張りなんか、支えてくれるヤツがいてこそさ。だから……あんたも、頼むぜ」

「頼む、とは？」
と問い返すのは愚直な行動だっただろう。途端に海賊の顔色が普段の三割増しほど赤味に傾いて見えた。これまでの雰囲気も本音も押し流す勢いで言葉が矢継ぎ早に繰り出してくる。

「おれの空威張りが品切れになったらあんなの。『魔』に関わるのは責務だ」って言葉でおれを引っ張りあげてみるってんだ恥

ずかしいこと言わせるんじゃないよ！」

「わ……わかった、わかった」
さすがに王子もたじろいで、生返事のようになってしまった。

にもかかわらず、海賊は表情を改め、笑う。先程までのような不敵を感じさせるものではなく、もつと穏やかな笑顔。

「ま、おれも、あんたがくれたばかりかた、魔に吞まれそうになったら、ケツ蹴っ飛ばして活入れてやるからよ」
「尻を蹴飛ばされるのは嫌だな」
「ならしつかりするんだな、王子様よ！」

にやり、と笑みの質を変えた海賊を見て、王子は思う。
やはりこの海賊には、いかなる内心をも覆い隠すこの不敵な笑みが一番似合う。

そして、さらに思うのだ。
もし他の誰も付いてこないとしても、この海賊が隣にいれば、自分はまだ恐怖に吞まれたりするまい、と。

後日。

彼らは空中樹海に辿り着く。太古より世界を見守り続け、世界の危機に際し、試練を乗り越えた人間に力を与えるという、神なる竜の住まう地に。

同じころ、深王の様子を見るためにその

下へ赴いたオランピアが、王からの伝言を携え、アーマンの宿を訪れた。

「人の手では決して討てぬ『魔』だが、卿ならならぬいは、と思えてな。強制はしないが、挑む勇気と意志があるなら行きなさい」

冒険者ギルドは、ギルドマスターであるモンクの少女を中心に協議の末、満場一致で、神竜の試練を受け、『魔』のいる地の底へと挑む決心をした。



そして、王子と海賊と、その仲間達の、新たな戦いが始まる。

End